

メートル法単位を表す国字の製作と展開

笹原宏之

(キーワード：字誌, 国字, メートル法単位, 中国, 朝鮮・韓国)

一. はじめに

現在日本では、メートル法の単位は「センチ」「センチメートル」のようにカナか、「cm」のようにローマ字記号で表記することが多い。しかし国文学で書誌を記す時などに「糶」という字も使われている。この類として、漢和辞書などに以下のような字が載っている。

ミリ キン アン アカ ヘク キロ
トル 糶 糶 粉 米 料 栢 秆
トル 坭 壩 粉 立 針 距 舛
ゴウ 庭 庭 庭 瓦 舛 距 舛 トル 庭・噸⁽¹⁾
トル 糶・糶 亞・安 距・距

「米」,「立」,「瓦」,「亞」,「安」は、「米突」,「瓦^{ガランマ}蘭麻」などの音訳表記を省略したものであろう⁽²⁾⁽³⁾。漢和辞書等によれば、そのほかの字は、「米」,「立」,「瓦」などにキロならば「千」, センチは百分の一で「厘」というように、日本人が組み合わせた形声的な会意の字すなわち国字で、「粉」などは国訓だという。

しかし、漢和辞書の中には、『大漢和辞典』(1955～60。以下見出しのほか本文、付録も含む)のように「糶」,「舛」の類を「国字」としないものがある。さらに、エツコ・オバタ・ライマン『日本人の作った漢字』(1990)は、『模範英和辞典』(1911)に「糶」があるが、日本製か中国製かを明らかにするには「大変な文献調査」が必要であるという。

製作された時期に関しても、国語学や文字の専著に明示したものはないようで、藤堂明保『学研漢和大事典』(1978)等は「江戸末期から明治の初め」のように幅をもたせている。

これらの字がいつの時代に作られ、どのように使われ、なぜ定着に至ったのであろうか。その経緯を明らかにするために、漢字圏の各国を比較しながら字誌⁽⁴⁾を記していく。

二. メートル法単位を表す国字の製作

(1)前史

フランス革命により生まれたメートル法は、江戸時代のうちに日本に紹介された。ローマ字をカナに置き換えた例や、『蘭學重寶記』(1835。早大蔵版本)の「徳加瓦蘭馬」^{デカガラム}「十瓦蘭馬」、高野長英訳「三兵答古知幾」(1850。同)の「幾里唵喀朗馬」^{キリヲガランマ}、『舎密局必携』(1862。同)の「埵支米的耳」^{デシメーテル}など漢字による音訳が見られる。明治初期には「拇」^{サンヂ}などとも表記していた。

外来の単位は、「封度」^{ポンド}の類よりも、尺貫法と同様に一字で表記する傾向があった。「オズ」^{オンス}(Oz。『遠西醫方名物考』1822。早大蔵版本等)、「氏」^{グレイン・グレイン}(G。同)、「ろ」^{グラクマ}(『西洋度量衡』1855。早大蔵版本等)、「ポンド」^{ポンドステルリク}(\$)。『官板バダビヤ新聞』1862・8。日本初期新聞全集)、「ギ」^{ギユルデン}(g。同)、「ドル」^{ドル}(\$)、「磅」^{ポンド}等が使われた。その理由は、書きやすく、意味や読みがわかりやすく、スペースも節約できるためであろう。

(2)製作の時期と目的

1882年に中央気象台はメートル法を採用した。1891年3月にメートル法が尺貫法と併用される法定の度量衡となり、2年後に施行されることとなった。そのためフランスを意識した従来の「佛里」「佛尺」では不穏当となったが、「ミリメートル」などカナでは長くて不便である。そのために研究して「記號」を作り、7月1日に各気象台に通知し、気象観測の月報、雑誌等に使い始めた(『氣象集誌』(1891・7。気象庁蔵)、小泉袈裟勝『度量衡の歴史』(1961)等)⁽⁵⁾。この時は次の22字が定められた。

耗 糧 粉 米 料 栲 秆
壱 券 立 針 疋
彪 應 毳 瓦 疋 疋 疋
窶 安 窶

このうち、「粉」はコナを意味する漢字と形が暗合する。「料」も、『古今韻會舉要小補』(早大蔵版本)、『康熙字典』等に「躑」の古字とある。ただし、これは『古今韻會舉要』の「躑」の誤刻による「幽靈文字」⁽⁶⁾であった。「耗」も、『篇海』(内閣文庫蔵)を調べると「耗」の異体字であろうか「知革切」とし、また張元生『社族人民的文化遺產一方塊壮字』(『中国民族古文字研究』(1984))に糞を表す壮文字もあり、国訓である。ただ「粉」「米」、「立」、「瓦」以外の字は、これらの用法が定着していないので、以下では国字と同様に扱う。

三. メートル法単位を表す国字の広まり

(1)日本

①定着への歩み

気象台は上記の字を作ったが、すぐに広まったわけではない。例えば、『日本大辞書』(1892)、『帝國大辞典』(1896)、『ことばの泉』(1898・1903二〇版)、『言海』(1904)、『日臺大辞典』(1907)は、「美利米突」^{ミリメートル}「珊米突」^{センチメートル}「米突」^{キロメートル}「基米」^{キログラム}、「瓦」^{センチメートル}「基」^{センチメートル}を示し、『二六新報』(1894・8・11)は「米突」(8・15に「キログラム」「キロ」も)、『學生近視ノ一豫防策』(1897)、『國字問題論集』は「密迷」(図表で。本文では「ミリメートル」)、徳富蘆花『不如歸』(1900)。近代文学館復刻)は「珊」^{センチ}「米突」^{センチ}、「農工務省訓令」(『官報』1903・8・14)は「仙迷」^(センチメートル)を使う。気象台の造字はなお位相的な文字であった。

しかし次第に使用範囲が広がっていく。その一つの契機となったものが、1903年の『度量衡法施行細則』(『度量衡要義』(1916)、『現行法令輯覽』(1916・1918)等)とみられる。これには度量衡器に用いる「略字」として次の13字が選ばれ、記された⁽²⁾。

耗 糧 粉 米 秆
 塲 竝 立
 甍 廔 甍 瓦 甍

これらの普及には、法規のほか、辞書や算術教科書によるところも大きかろう。辞書では、郁文舎『理科辞典』(1904・1905二五版)が「甍カロリー」^{キログラムメートル}「甍米」^{センチメートル}を載せた。『工業字解』(1906以前)は「近時」の「糧」^{ミリメートル}「秆」^{センチメートル}「稻」^{センチメートル(ママ)}を取り上げ、中村達太郎『日本建築字彙』(1906・1915八版)は「耗」^(ママ)「竝」^{センチメートル(ママ)}「甍」(「甍」に作るがこの類は活字の制約やデザインによろうから以下このように示す)など「メートル式の諸字は中央氣象臺に於て定めたるもの」^{センチメートル・センチメートル}、「日本字」と出自に触れた。専門分野に偏らない『新案漢字典』(1907)も「最近」の「耗」^{センチメートル・センチメートル}「糧」^{センチメートル・センチメートル}「秆」^{センチメートル・センチメートル}「竝」^{センチメートル・センチメートル}「甍」^{センチメートル・センチメートル}「安」^{センチグラム・センチグラム}「甍」を示した。国語辞書にも、金澤庄三郎『辭林』(1907)に「糧」^{センチメートル}「珊米突も」^{センチメートル}「米」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}「瓦」^{センチメートル}「甍」(甍米も)が載ったが、キロメートルは「幾米」であり、まだ体系的に収めたわけではなかった。

文部省『高等小學算術書』(1905)に「耗」^{センチメートル}「糧」^{センチメートル}「米」^{センチメートル}「秆」^{センチメートル}、「立」^{センチメートル}、「甍」^{センチメートル}「廔」^{センチメートル}「瓦」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}が載り、以後の尋常小学校の国定算術教科書には「甍」^{センチメートル}「竝」^{センチメートル}「竝」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}、「甍」も使われるが、明治時代においては位相性が強かったようである。文部省國語調査委員會『漢字要覽』(1908)は、「本邦製作字」において「近來、西洋ノ醫學、數學等ノ入ルニ及ビテ、新ニ製作セシモノ」として「耗」^{センチメートル}「糧」^{センチメートル}「粉」^{センチメートル}「米突」^{センチメートル}「料」^{センチメートル}「稻」^{センチメートル}「秆」^{センチメートル}を挙げるが、「瓦」^{センチメートル}、立、亞等モ、之ト同例ナレドモ、通常ハ「竝」^{センチメートル}、「甍」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}、「甍」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}「等ノ字ヲ用キテ、ソノ他ハ多く用キザルガ如シ」というように、頻度に差があることも説く。『日本大百科辞典』(1908～19)は「耗」^(ママ)「秆」^(ママ)「稻」(誤植に粕も)「秆」^(ママ)、「甍」^(ママ)「竝」^(ママ)、「甍」^(ママ)「甍」^(ママ)「甍」^(ママ)を掲げるが、「近來我國の製作」^{センチメートル}、「近年」の「國字」である「糧」^{センチメートル}「耗」^{センチメートル}「秆」^{センチメートル}、「竝」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}は「多くは未だ學術以外廣く用ひらるゝに至らず」とあり、範囲が限定されていたことが明らかである。『大蔵省訓令』(1906)の「瓦」^{センチメートル}や、『海軍省達』(1915)の「耗」^{センチメートル}、「甍」^{センチメートル}以来、「耗」^{センチメートル}「糧」^{センチメートル}「粉」^{センチメートル}「米」^{センチメートル}「秆」^{センチメートル}(熟字の秆程も)、「甍」^{センチメートル}「立」^{センチメートル}、「瓦」^{センチメートル}「甍」^{センチメートル}(甍カロリーも)「甍」^{センチメートル}が法規に使われた「メートル法」を用いた法規一覽^(ママ)』(1927～32)、『法令全書』。『大測量學』(1914・28八版)など専門書に

は「糶」「秆」が使われている。小口忠太「近視眼の原因となる漢字の改造」(『太陽』26-8 (1920)では、「[ミリメートル] (以下略して耗を用ゆ)」として「耗」(「耗」は誤植)を使う。

②改良の動き

先の『漢字要覽』は、従来と異なるアールの系列の字を記載した。「安」よりも音が近い「亞」を選んだのであろう。

長澤龜之助『算術辭典』(1909)に至り、それまで見られなかった「𧄸」「𧄹」が加わった。それにより、「米」,「立」,「瓦」がそれぞれ「毛」から「千」まで揃い、表記の体系が整った。「1糶」のように用いている。さらに「万」をつけた字が増えた。「𧄸」は『康熙字典』等にはなく、『四聲音切韻海』(内閣文庫蔵)に偶然あるが、字義は関連しない。

	耗	糶	粉	米	秆	𧄸	𧄹	𧄺	𧄻
	𧄼	𧄽	𧄾	立	突	𧄿	𧅀	𧅁	𧅂
	𧅃	𧅄	𧅅	瓦	蘭	𧅆	𧅇	𧅈	𧅉
サンチアール・サンタール・センチアール・センチール						エクトメートル・ヘクトメートル	ミリメートル		
							キロ・キログラム		
						エクタール・ヘクタール			

さらに大きな単位を表すため、「鐵道省令」(『官報』1921・10・14)あたりから、形声文字かグラムトンの合字「𧅊」も現れる。これは「噸」と区別するために作られたのであろう⁽¹⁾。

『國民百科大辭典』(1934~7)は「耗」~「米」「秆」,「𧄸」「𧄾」「立」「𧄿」「𧄺」,「𧄼」「瓦」「𧄽」(𧄽重, 𧄽米も)「𧄻」を「我國法(制)定略字」と称し、「略語」として「粉」のほか、アールに対して音訳に会意を兼ねさせたような「阿」も用いる(後述)。

③一般化と淘汰

後藤朝太郎は、『漢字音の系統』(1909・11訂正増補3版)において「秆」が「世間一般から正字として使用せられ」ていると一般化を認め、『文字の研究』(1910)にも「糶」「秆」を取り上げ、『線音雙引漢和大事典』(1911五版)に「耗」「糶」「秆」「𧄸」「𧄹」,「𧄺」「𧄻」,「𧄼」「𧄽」「𧄾」「𧄿」「𧄺」「𧄻」を「現代語」として採用した。

『誤りたる文字の讀方』(1911・12二版)は「耗」~「秆」,「𧄽」~「𧄿」,「𧄾」~「𧄺」,「𧄼」,「安」,「𧄻」を載せるが、『大字典』(1917),『大漢和辭典』(1925),『用字便覽』(1937)。「度量衡施行細則」(1909)も引くは「𧄼」を採る一方,「𧄼」「安」「𧄻」を落とす。『大字典』に現行本のように「𧄼」「𧄺」「𧄻」,「𧄾」~「𧄺」が加わったのは後のことである。『日用舶來語便覽』(1912)は「糶」⁽³⁾,『日本外來語辭典』(1915)は「耗」「糶」「秆」,「𧄺」「𧄾」,「廣辭林」(1925・33一二〇版)は「耗」~「秆」,「𧄾」「𧄺」「𧄻」,「𧄼」~「𧄺」「𧄻」,『新修百科大辭典』(1934)は「耗」~「秆」,「𧄾」~「𧄿」,「𧄼」「𧄽」,「𧄼」~「𧄺」(基も),『辭苑』(1935・41三五二版)は「耗」~「秆」,「𧄼」~「𧄿」,「𧄼」~「𧄺」というように採録に揺れがあり、字により一般化の程度が異なっているようである。『工業化學語彙』(1928)附録は「kg」「米トン」を使うが、メートル法のトンには「𧄼」を注をして用いている。

新たに作られた字を採録する辞書も編まれる。勝屋英造『外來語辭典』(1914初・再版)は「糶」,「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ(基も)に「甞」^ミ「甞」^ミを加え,『大日本國語辭典』(1915~9)は「耗」~「秆」,「漚」~「甞」,「甞」~「甞」のほか「甞」を,『言泉』(1921~8)も「耗」^ミ「糶」^ミ「秆」,「漚」,「甞」^ミ「甞」^ミのほか「甞」を載せる。「甞」は,平凡社『大百科事典』(1931~5)に「耗」~「秆」(邦字,略字。秒漚なども),「甞」~「立」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」~「瓦」^ミ「甞」^ミ,「阿」,『圖解現代百科辭典』(1932~3)に「耗」~「秆」^ミ「秆」^ミ,「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ。~「甞」,『大言海』(1932)に「耗」^ミ「糶」^ミ「粉」^ミ「秆」(吉米も),「甞」~「甞」^ミ「甞」^ミ(吉瓦も),荒川惣兵衛『外來語辭典』(1941)に「耗」^ミ「糶」^ミ「米」^ミ「秆」,「甞」^ミ「甞」^ミ「立」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミ「瓦」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミとともに載った。荒川は『外來語學序説』(1932)では「甞」をなくし,「粉」^ミ「秆」^ミ「稻」,「漚」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミを加えて挙げる。頻度も反映していよう。

他の漢字と熟合しても使われるようになる。『鮮譯國語大辭典』(1933)は「糶」(珊米突も。キロメートルは幾米突),「甞」(誤植の甞も)「甞」(基も)のほか,「密利耗」^ミ「密利甞」^ミという重言的な文字列を示す。『大辭典』(1934~6)は「耗」~「秆」^ミ「秆」^ミ,「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」~「甞」^ミのほか「^{キロでい}秆程運賃」,「^{グラムトンあつかひ}甞扱」という熟字を掲げたように,字としての資格が確かなものとなっている。『氣象要覽』(1935・8等)には単位として「瓦カロリー/糶²」があり,用法にも広がりが増した。

改正『度量衡法施行令』(1924。『現行法令輯覽』(1925)等)において,従来の「耗又ハMM」が「mm又ハ耗」と変わり,「粉」,「漚」,「甞」^ミ「甞」^ミが削られたが,新たに「甞」^ミ「甞」^ミと「甞」^ミが加わり,用途も度量衡器に限らなくなり,一般化に拍車をかけた。『メートル法度量衡に就て』(1924),『度量衡法令改正要旨』(1928)等には「平秆」,「立耗」の類も加わる。

「帝國議會議事速記録」(内閣印刷局『本邦常用漢字の研究』(1941))に「秆」が27回,「甞」が155回使用され,『滿洲氣象報告』(1915)に「耗」,『栃木縣史』(1933)に「秆」が用いられたが,昭和に入ると公的でない書籍でもさかんに使われるようになる。『久米博士九十年回顧録』(1934)に「七百萬 甞」,「二千三百七十一萬 甞」とあるほか,『國字二關スル眼科學的研究』(1928)に「耗」^ミ「糶」^ミ,『北村彌一郎窯業全集』(1929)に「甞」,『地形圖の讀方と其利用』(1932・333版)に「耗」^ミ「糶」^ミ(キロメートルは「基米」),『歴史と地理』(1933)に「秆」,『東京朝日新聞』(1936・1・28)に「秆」(キロと併用),『氣象學講話』(1939)に「耗」^ミ「秆」^ミ,「甞」などがある。

漫画『凸凹黒兵衛』(1934)に「五十萬秆」とあるように,児童書にも用いられる。しかし,使用字種は淘汰されてきたようで,前述した長澤龜之助も『新算術教科書』(1916)では「耗」^ミ「糶」^ミ「米」^ミ「秆」^ミ,「漚」^ミ「立」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミ「瓦」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミ「亞」^ミ「甞」^ミに減らしている。『文字のいろいろ』(1924。『国字の字典』)には「甞」^ミ「甞」^ミがあるが,『少年少女常識叢書』(1924)⁽²⁾に「糶」^ミ「秆」^ミ,「甞」^ミ,『科学知識』六(1926)に「甞」^ミ「甞」^ミ,1926年の雑誌『中央公論』に「秆」(「七・〇秆秒」)。『雑誌用語の変遷』(1987),工業教育振興會『修正中等教育算術書』(1933)に「耗」^ミ「糶」^ミ「秆」^ミ,「甞」^ミ「甞」^ミ「立」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,「甞」^ミ「甞」^ミ「甞」^ミ,『農業大辭典』(1934)に「耗」^ミ「糶」^ミ(「二

糧八耗]のようにも使う)、「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「亞」,「𧯛」,『計量年鑑』(1935)に「耗」,「糧」,「秆」(時速)、「𧯛」,『日本地名大辭典』(1937~8)に「秆」,「𧯛」,『子供の科學』(1938)に「秆」がある程度で、字ごとの使用頻度に差が広がり、「𧯛」,「𧯛」等は使われなくなったようである。『中等教育算術書』では「キロメートル(秆, km)」のようにも示され,『子供の科學』(1931)には「𧯛」を使わない「キロ瓦」が現れるように、主たる表記とされない場合もあった。

④文部省の公認

こうした使用の実情の中で、芳賀矢一『國語と國民性』(1928)は「糧」が「普通に知られてをる」と認め、長谷川誠治『日本國字論』(1932)は「耗」,「糧」,「秆」,「𧯛」の類の「和製漢字」を例に挙げ、漢字を自由に「駆使用するだけの能力ある日本人」を讃える。後藤朝太郎『文字の史的研究』(1932)は「糧」,「米」,「𧯛」,「秆」,「𧯛」,「瓦」,「𧯛」,「𧯛」は今後日本で「用途を増す」と予告する。その翌年には、文部省『小學國語讀本』第4期(1933。1991復刻)に「耗」,「糧」,「秆」が使われるようになり(『国定読本用語総覧』等)、前述した算術教科書とともに学校を通じて全国的な文字となった。

絲ハ、一糧、二糧ト、見ル間ニノビテ、二米グラキニモナリマシタ。(5巻77頁)

『尋常小學算術』(1939~41),『尋常小學地理書』(1942)にはこのほか「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」も使われている。1935年の新聞に対する調査(『新聞ノ漢字使用度数シラベ』(1941))でも「秆」が10回現れた。

海軍は「糧」等を使っており、「秆」,「𧯛」,「𧯛」等を「常用漢字表」に入れるよう海軍省が要求した(塩田紀和『漢字表の作成とその文字の取捨』(『言語生活』149(1964)等))。大西雅雄も「糧」について『日本基本漢字』(1941・42修正一〇版)で2786位にあることを根拠としたのか、「小學校の漢字」(『教育・國語』1939・11)等において、「小學讀本」にあるのに「常用漢字表」にないと非難した。小林好日『國語學の諸問題』(1941)は「糧」,「𧯛」が表意文字で、カナよりはやく理解できると説く。こうした潮流において、「耗」,「糧」,「粉」,「秆」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」,「𧯛」が、1942年に國語審議会が答申した段階ではなかったが、文部省が発表した「標準漢字表」に採用された(『週報』324,『新字鑑』(1943)等)。

その後も陸地測量部『同型類字集』(1942)に「𧯛」が入り、同『頻字略字集』(1942)に「耗」,『地理學』(1942)に「𧯛」などが使われ、石原純『現代日本文明史』(1942)には「耗」,「糧」,「粉」,「米」,「秆」,「𧯛」,「立」,「𧯛」,「𧯛」,「瓦」,「𧯛」等が普通に用ひられてゐる」と認識されるに至った。

生後二箇月目には、體重が五𧯛、身長が五十八糧ほどになつて、ふつうの子より發育がよかつた。(太宰治『晩年』(1946)220頁。近代文学館復刻)
などとあるように戦後も使われ、「朝日新聞社特別撰定追加漢字」(1946。『標準漢字の研究』等)にも「標準漢字」だった「耗」以下の字が残った。

多くの国語・漢和辞書も「耗」～「秆」, 「氈」～「秆」, 「氈」～「氈」「氈」等載せつづける。『大辞林』(1988)には「^{サンダ}糶」, 『漢字の読み方』(1977)には「^{アール}糶」も載っている。新たな訓の例としては、『言林』(1949)に「kilo 噸・^{ヘクタール}噸」が掲げられた。また、金田一京助『辞海』(1952。境田稔信氏教示), 『広辞苑』(1955等), 『新言海』(1959)にメートル法のトンつまりメートルンを表すため、アメリカ式のトンと紛らわしい「米噸(屯)」を「^{キロメートル}糶」とした国訓字も挙げる。あるいは2字を誤って1字に印刷したものか。誤植は従前より見られたが、『国語博辞典』(1952)にも「^{キロメートル}糶」があるなど少なくない。

日本で普及をはたしたのち、樺太、南洋のほか『帝國法規』(1938)等, 国外に輸出されるようになっていく。

(2)中国

①日本からの輸入

清朝末期に西欧の度量衡が伝わり(『清國行政法』三(1910)), 『列國歳計政要』(西學大成)に「^(キロメートル)結羅米特」, 「^(キログラム)喀羅格郎」, 「^(アール)阿爾」, 「^(ヘクタール)合搭兒」等の音訳表記が使われている。日本製漢語と同様に, 19世紀末から教科書や科学書に, 日本から伝わった「秆」, 「氈」等が体系的ではないが使われ始めた⁽⁷⁾。1912年頃に「日本の縮写名称」である「^{グラム}糶」「^{アール}秆」等を探り入れようという主張や, それについて反対もあり, 国字を応用したのであろう「^{アール}厂」「^{ヘクタール}里」「^{アール}行」と「^{グラム}十」「^{アール}百」「^{アール}千」等による造字も主張された⁽⁷⁾。

『中等算術教科書』(1905～7)に「^(グラム)葛蘭」, 「^(アール)畝」, 「^(アール)飭」, 「^(アール)儻」, 「^(アール)併」や「^(アール)惚」, 「^(アール)懣」, 「^(アール)懣」, 「^(アール)懣」の類を用いた「^(アール)竹米突」のほか, 「^(アール)懣」の誤植だが「^(アール)糶」も現れた。藍田環『藍色印書法』(『東方雑誌』8—12(1912))の「立方糶」, 「瓦」のように, 「^(アール)呷」, 「^(アール)糶」, 「^(アール)湮」等とともに一部で使われていく。

②定着と応用

『文字源流参考書』(1914・16四版)は「^(アール)氈」～「^(アール)氈」や「日本所製の^(アール)氈」「^(アール)瓦」～「^(アール)氈」を「簡寫」として示す。「瓦」是北京語では wa³で, gramme と音が似ないので, 「瓦斯」を「加斯」に変えたように独自に「^(アール)克」(ke⁴)を用いて体系化した。『支那文字解説』(1940)に「度量衡に^(アール)氈^(アール)尅」を作ったとあるが, 第二字は「^(アール)氈」か。『難字解説字典』(1977)が「^(アール)糶」を国字とするのは誤り。

辞書にも載るようになる。『中華大字典』(1915)は「日本字」の「^(アール)氈」～「^(アール)氈」のほか以下

耗 糶 粉 米・味・糶 料 糶 秆 粉
 氈 糶 粉 秆 針・針 垢 秆
 氈 糶 尅 尅 糶 氈 氈

これらは中国でも用いるため, 日本字と判断できなかったのであろう。「米」, 「立」では

意味が不明確なので、新たに工夫した「味」「艸」、**「竝」**も載せた。「味」は音訳字であり、【英華字典】では mile に当てていた。「竝」は後に旁が体系化される。

【辭源】(1915)には、「略號」である「日本所製字」の「甞」～「甞」のほか、【中華大字典】にない「立」**「𧄂」**「安」**「𧄃」**を載せるが、逆に「**「𧄄」**」「**「𧄅」**」「**「𧄆」**」は載せない。【算術辭典】など日本の書籍を引用しており、影響があったことが明らかである。面積に「方耗」、体積に「立耗」といった略号、本文にも「一立方耗」という文字列も現れ、統編(1931)には「**「𧄇」**」(micron)が加わり(【大漢和辭典】に「邦」(国訓)とあるが誤りか)、熟字に「**「𧄈」**」も入った。

【日支大辭典】(1917。荒川惣兵衛「支那語におよぼした英語の影響」【英文學研究】14-2。1934))にも「略記號」として「耗」～「**「𧄉」**」～「**「𧄊」**」**「𧄋」**～「**「𧄌」**」～「**「𧄍」**」(「立」は cube)、「**「𧄎」**」～「**「𧄏」**」**「𧄐」**「安」(阿爾)**「𧄑」**が載り、【日用百科全書】(1919・21一〇版)にはこのほか「**「𧄒」**」**「𧄓」**「方耗」**「𧄔」**「**「𧄕」**」**「𧄖」**「法**「𧄗」**」など熟字や「瓦」**「𧄘」**、既存の字と暗合する「**「𧄙」**」が使われている。【德華大字典】(1920・27五版)には「省筆符號」として「**「𧄚」**」**「𧄛」**「**「𧄜」**」**「𧄝」**のほか「**「𧄞」**」**「𧄟」**「**「𧄠」**」**「𧄡」**「**「𧄢」**」**「𧄣」**「**「𧄤」**」**「𧄥」**があり、応用した「**「𧄦」**」が加わっている。【標準德華大字典】(1967)にも転載されている。杜定友が「**「𧄧」**」(【圖研究】(1928)10に転載)において「吾國」で「**「𧄨」**」は「讀米厘」此類之字甚多、算學上用之」というように、位相的な用字であった。

1934年の實業部全國度量衡局「度量衡新制簡便折合表」、【標準制正名表】(【中華民國法規大全】(1936))の「(中文縮寫)は、【法定名稱】**「公釐・分・寸・尺・丈・引・里」**、**「公撮・勺・合・升・斗・石・秉」**、**「公絲・毫・釐・分・錢・兩・斤・衡・擔・鐵」**、**「公釐・畝・頃」**を組み合わせたもので、ここに日本とほとんど別種となった。

櫃 粉 𧄉 𧄊 𧄋 𧄌 𧄍
𧄎 𧄏 𧄐 𧄑 𧄒 𧄓 𧄔
𧄕 𧄖 𧄗 𧄘 𧄙 𧄚 𧄛 𧄜 𧄝 𧄞 𧄟
𧄠 𧄡 𧄢 𧄣

「**「𧄕」**」の旁を「刃」とし、「**「𧄖」**」の旁を「糸」ともする。「耗」「**「𧄉」**」**「𧄊」**「**「𧄋」**」**「𧄌」**「**「𧄍」**」**「𧄎」**「**「𧄏」**」**「𧄐」**「**「𧄑」**」**「𧄒」**「**「𧄓」**」**「𧄔」**「**「𧄕」**」**「𧄖」**」については「舊有譯名」といい、日本製は取って代わられた。「毛」「厘」「分」は新旧で桁が変わったものがあり、【大漢和辭典】には「**「𧄗」**」の体系に「標準制」の「略號」とあるが「**「𧄕」**」**「𧄖」**」に混乱が見られ、漏れもある。

【辭海】(1937)は「日本字」「舊譯名」として「**「𧄉」**」～「**「𧄑」**」を載せる。「**「𧄑」**」は本書にいうように中国では主にキロワットを表した。「**「𧄒」**」**「𧄓」**」等が「舊譯名」にも出るほかは1934年の表と同じものを「舊略記」「舊譯名」とし、國民政府が公布した【度量衡法】(1929)の「標準制」の「略記」**「𧄕」**「**「𧄖」**」として、「**「𧄕」**」**「𧄖」**」に作るほかは表と同じ字を載せる。

【最新支那百科事典】(1939)の「日用支那語」は「**「𧄗」**」**「𧄘」**「**「𧄙」**」**「𧄚」**」があるが「**「𧄛」**」はガロンとする。【國語辭典】(1937・48再版)は、「略字」として「耗」～「**「𧄉」**」**「𧄊」**～「**「𧄋」**」**「𧄌」**」～

「躉」,「𧯛」～「克」(瓦)～「𧯛」と「舊譯名」の「米」「味」,「𧯛」「安」「𧯛」,「𧯛」「𧯛」「𧯛」「躉」(本来二字か)「躉」(升に点を打つ箇所もある)「躉」「𧯛」「𧯛」を示すようになった。『國音字典』(1949)も以下のように日本製漢字と中国製漢字を折衷した。

耗 糧 粉 糶 料 稻 秆
 躉 鈞 始 躉 躉 躉 躉
 𧯛 𧯛 𧯛 克 𧯛 𧯛 𧯛

1931年に「施行細則」が修正され, 実業部の重量や質量の検定を経た「毛(毫)」「厘(釐)」「分」は, 必要な時に「𧯛」「𧯛」「𧯛」とできるようになった⁽⁷⁾。これも国字の応用であろう。先の1934年の表では, 「科學術語」で必要な時には長さに「尾」「廬」「房」, 重量に「𧯛」「𧯛」「𧯛」, 地積に「𧯛」「𧯛」「𧯛」を使ってよいとしており, 『辭源』(1950縮本・1955三版改編本)は「𧯛」(仟瓦)「瓦」, 「𧯛」～「克(蘭姆)」～「𧯛」, 「昔之略號」「𧯛」を載せるほか, 「公釐(公厘)」, 「市分(市份)」, 「市毫(市垓)」等を示す。

上記のように複数の体系が存在しているが, 上海の『新寫口語彙編』(1954), 『簡化漢字字体説明』(1956), 『拼音形声字批判』(1956), 北京の『中国音楽史』(1957)という出版物の奥付に「782×1092耗」などのように「耗」が使われた。『華俄辭典』(1955。モスクワ)は「耗」「糧」「稻」, 「𧯛」「躉」「𧯛」「𧯛」, 「𧯛」～「𧯛」, 「𧯛」～「𧯛」を収めるが, 「耗」に xao⁴, 「稻」, 「𧯛」に ɔo² という音注があり特徴的である。『同音字典』(1955)には「最常用」「複詞的略字」として「糧」(厘米), 「𧯛」(千瓦)が, 『拼音』(1957・4)や『文字改革』(1964・2)には「𧯛」, 『標準電碼本』(1963)には「𧯛」が載ったように, 一部で使用された。

これらの由来については, 王立達「現代漢語中從日語借來的詞彙」(『中国語文』1958・2)は「耗」「糧」「秆」, 「𧯛」を「日本人創造」, 「我国所沿用者」, 『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』(1959)も「耗」「糧」, 「𧯛」「𧯛」「𧯛」を日本語からとし(さねとうけいしゅう「中国語のなかの日本語」(『言語生活』182(1966))), 宋文軍「日漢字中“和字”和它的音訳問題」(『日語學習与研究』1980・4)も「和字」の「糧」「秆」, 「𧯛」は「解放前」に「流行」したといい, 『漢語外来詞詞典』(1984)や『異文化的使者』(1991)も「耗」「糧」「秆」, 「𧯛」等は日本から来たとするなど, 時には意識していた。

③台湾・満州における普及

日本に統治された地域では使用が強制されていく。台湾はカナ表記を示す「臺灣度量衡規則施行規則」(1906)等を経て, 1924年に新たな「臺灣度量衡規則施行規則」(『臺灣法令輯覽』(1926)等)を公布し, 日本と同じく「略字」の「耗」「糧」「米」「秆」, 「𧯛」「𧯛」「立」「𧯛」「𧯛」, 「𧯛」「瓦」「𧯛」「𧯛」を定め, このほか慣行のものも「用ウルコトヲ得」とした。「臺灣總督府告示」(1921・1924改正)に「耗」「糧」, 「𧯛」「𧯛」, 「𧯛」「𧯛」「𧯛」「𧯛」, 『臺灣統治概要』(1945)に「耗」「糧」「秆」, 「𧯛」「𧯛」が用いられている。

満州でも, 關東廳令「關東州度量衡取締規則」(1924。『現行法令輯覽』)の「𧯛」「躉」を削り,

「屯」を「甦」と改めた「權度(度量衡)法」が1934年に公布された(『滿洲國政府公報』1934・1・25, 『滿洲國法令輯覽』(1934・38九版))。

糶	耗	糶	粉	米	秆
甦	坳	立	竔	奸	
甦		瓦	甦	甦	甦
		阿	陌		

日本と違えようとしたのかアールが中国音でより近い「阿」と訳された。「陌」は古来の漢字と暗合した。さらに、「^{ミクロン}」に対して小数の位「微」を用いて「糶」が新造された。中国では後に「微米」も使われる。「度量衡法施行規則」(1934)に「耗」, 「實業部令」(1934)等に「耗」「粉」「糶」「米」, 「甦」「坳」「立」, 「甦」「瓦」「甦」(kWには啓羅瓦特)を使う。中央気象台の報告に「耗」が使われるが、「公里」「公尺」, 「公噸」も経済統計に用いられているように揺れがあった。『滿洲國地名大辭典』(1937)は「糶」を「糶」に作り、「坳」がない一覧表を載せる。

(3)朝鮮・韓国

①日本からの輸入

「度量衡法」(『官報』1905・3・29等)には「^(ミリメートル)美利米突」^(センチリットル)「先知坳突」^(キログラム)「岐路久覽」等の音訳表記が参考として示されている。4年後の改訂(『官報』1909・9・21等)で日本の「匁」等を採用したが、『皇城新聞』(1909・9・18)等においてはなお「基路米突」やハングル表記が使われる。

しかし辞書では、『新字典』(1915)の「新字新義部」に「耗」~「米」~「秆」, 「甦」~「竔」~「奸」, 「甦」~「甦」や「日本」の「甦」~「瓦」~「甦」が載った。「日本俗字部」でないが、新しい日本製漢字という意識がなかったとはいええない。日本は占領に伴い1926年に「朝鮮度量衡令施行細則」(『朝鮮法令輯覽』(1938)等)を公布し、日本や植民地下の台湾と同じ「略字」の「耗」「糶」「米」「秆」, 「甦」「坳」「立」「竔」「奸」, 「甦」「瓦」「甦」「甦」を定めた。『朝鮮總督府施政年報』(1935)に「秆」, 『朝鮮總督府告示』(1936)等に「耗」「糶」, 「甦」「坳」, 「甦」「甦」が使われ、『鮮譯國語大辭典』(1933)には朝鮮語として「米」(キロメートルは「岐露米突」), 『朝鮮語辭典』(1943. 曹喜澈氏教示)に「耗」等が載る。

②定着への歩み

第二次世界大戦後も、大韓民国では例えば『漢韓辭典』(1948・9四版)に「新字」として「耗」~「秆」, 「竔」, 「甦」~「甦」「奸」が載せられ、草書を示す例もある。『明文新玉篇』(1950・57一一版)は日本製と明示し「耗」~「秆」, 「甦」~「奸」, 「甦」~「甦」「甦」に、『新字源』(1951・5三版)は「譯字」として「耗」~「秆」「秆」, 「甦」~「甦」に、類推音を付して載せる。『學生漢韓字典』(1955)は「耗」(毫の音とする)~「秆」のみを採るが、『大漢韓辭典』(1964)は「秆」(中国音を shih² とする)のほか、「日字」でなく「新字」として「耗」~「秆」, 「甦」~「竔」~「奸」, 「甦」~「甦」「甦」, 中国の「甦」~「甦」を取めるように、創作やアール等はないが字

種は一定しない。『最新弘字玉篇』(1974)は「𪛗」を落とすが「日」と注し、さらに草書・篆書も記す。

李蘭映『韓國金石文追補』(1968)や許興植『韓國金石全文』(1984)に「碑石高二五種、幅四九種」などとあるように、一部でなお使っている。また、ソウル・釜山間のハイウェイの道路標識を、日韓両国民に通じるようにとハンゲルから「速度〇杆」のように切り替えたところ、日本人の事故が減少したという(増田純男「漢字使用民族の漢字対策」(『言語』1976.5))。

四. おわりに

メートル法の単位を表す文字のほとんどは、1891年に日本で気象書類を的確に短く書くために作られたものであった。法規、算術書、地理書など使用位相が広がり、新聞、公文書、文学作品などから一般化し、児童書にまで使われるようになった。体系を整備しつつ取捨され、辞書や国定国語教科書にも載録され、戦前の文部省の「標準漢字表」に採用された。

さらに漢語などと同様に中国に伝わり、辞書や法規に載り、独自の改良を加えて用いられる。日本に統治された台湾、満州、朝鮮では法規により使用が強制され、満州では新たな字が加えられた。朝鮮では辞書に載り、独立後、韓国でも使用された。

百年たらずの間にこれほど広まった国字はない。メートル法の浸透と日本の圧倒的な国力という背景があったことはもちろんだが、「𪛗」の類のもつスペースの凝縮力、表音と表意を兼ねながらも単純な構成であり、覚えやすいことも要因であった。

このように展開したメートル法単位を表す国字であるが、その後現在までの間に日本国をはじめ、中華人民共和国、中華民国(台湾)、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国などでも使用されなくなっていく。そうした衰退の状況と原因については、別稿⁽⁸⁾をなすので参照されたい。今後、文字の歴史というものを明らかにしていくためには、抽象論や文字体系の記述のみならず、こうした字誌の蓄積が必要なのである。

注

- (1) 「噸」は中国で『海國圖志』(1852)、『格物入門』(1868)、日本で『英和對譯袖珍辭書』(1866再版。初版にはない)、『達』(1871。『法規分類大全』(1890~1))、『東京日日新聞』(1888・7・4)、『度量衡法施行令』(1909改正)等、朝鮮でも『西遊見聞』(1895。佛尺も)、『皇城新聞』(1898・9・6)等に用いられた。このように国字でないようで、そのうえLondonを「噸噸」(林則徐「擬諭英哨噸國王檄」(『漢語大詞典』))、Saturnを「利噸」(『増訂華英通語』(1861))、レキシントンを「歴星噸」(『巴來萬國史』(1886。遠藤好英「外来語の漢字表記一覽」(『漢字講座』9。1988)))など他の語の音訳に使われ、かつ「噸」と異なりヤードポンド法の重量や容量・積載能力にも使うので本稿では扱わない。「屯」「噸」「噸」等を使い分けた例もあったが、日本では「噸」は減り、略字として使われてきた「屯」が船舶業界や広告、韓国の法律等に残る。「t」と混淆したような「二毛運転手」も見られる。大陸やシンガポール、マレーシアでは別字の「噸」を簡体字とした。「噸」は日本以外では『人民日報』海外版、台湾の法律や新聞、韓

国の法律等に使われている。なお、森川龍文堂『新體明朝活字』(1944か)に千トンを表すとみられる「𣎵」がある。

- (2) メートル法実行期成委員会『日本メートル法沿革史』(1967)。
- (3) 矢口茂雄『明治以前に於ける外来語の音譯』(『外来語研究』4-2, 1938), 斎藤静『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』(1967), 『角川外来語辞典』(1967), 『増補外来語辞典』(1972), 『外来語の語源』(1979)等。
- (4) 以下の拙稿を参照されたい。「国字と位相」(『国語学』163, 1990), 「『佚存文字』に関する考察」(『国文学研究』105, 1991), 「地域訓の一考察」(『国語学 研究と資料』15, 1991), 「地域文字の考察」(『文化女子大学紀要』2(1994)), 「異体字・崩し字に字源俗解を介した漢字の国字化」(『国語文字史の研究』2(1994))。
- (5) 『宛字外来語辞典』(1979)は「三兵答古知幾」に「𣎵」, 『家事儉約訓』(1874)に「𣎵」があるように記すが原典にない。山内潤三『平松家本平家物語の研究』(1975)等の「教 𣎵」は影印では「𣎵」, 新訂増補故実叢書『安齋隨筆』(1953)の「引𣎵」等は「𣎵」の誤植。「誤りたる文字の讀方」が「𣎵」を「從來ありたる漢字」, 『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』が「𣎵」を中国語からなどとするほか, 『図解単位の歴史辞典』(1989)等にこれらが作られた年に異説があるが誤りであろう。
- (6) 拙稿「音義未詳の J I S 漢字について(仮題)」(『文化女子大学紀要』3(1995))参照。
- (7) 呉承洛『中国度量衡史』(1937), 程理溶修訂同(1957), 『光明日報』(1956・10・11), 周定一「“音訳詞”和“意識詞”的消長」(『中国語文』1962・10)。
- (8) 「メートル法単位を表す国字の各国における衰退」(『国語学 研究と資料』18(1994))。